



哺乳子豚の離乳期におけるえつけ飼料の効果

哺乳子豚が離乳時に求められることは、発育のばらつきが少なく、人工乳へスムーズに移行できるかどうかのポイントになる。効果を上げるのが哺乳中のえつけ飼料の給与であり、今回はこのことについて解説する。

●子豚の生時体重とえつけ摂取量

子豚の生時体重はばらつきが無く揃っていることが望ましいが、現実には多少のばらつきは避けられない。これは哺乳開始時の乳頭順位にも影響し、生時体重が大きい子豚はより母乳が出る乳頭を確保できるが、小さい子豚ほど母乳摂取量は少なくなると考えられる。

表1は生時体重と哺乳中のえつけ摂取量の比較である。摂食行動時間が多い子豚は生時体重が小さい子豚であることがわかる。つまり、母乳が十分に飲めていない子豚ほどえつかけを求めるということだ。またえつかけの摂取により生時体重の小さかった子豚の離乳体重も大きくなり、離乳時の体重のばらつきが小さくなった。

表1：生時体重のえつけ摂取量への影響（28日離乳）

摂食行動時間（分）*		極少 <7.2	少 7.2-28.8	中 28.8-57.6	多 57.6<
体重 (kg)	生時	1.6	1.5	1.5	1.3
	28日	7.8	7.5	6.7	6.8
	42日	10.9	11.3	10.8	10.6
増体 (g)	0-21日	218	198	170	177
	21-28日	240	267	244	254
	28-42日	224	271	284	257

*28日齢時に24時間ビデオ撮影し、1440コマ（1分毎）に分割し、摂食しているコマ数をカウントした
M.C.Applebyら（1992）

●離乳後の人工乳への移行

豚乳と人工乳飼料の成分には違いがあるほか（表2）、液体と粉体という形態上の違いもあるため、離乳後に初めて人工乳を給与するより、哺乳中から慣れさせるほうが、スムーズに移行できる。哺乳中のえつけ摂取量が離乳後の人工乳摂取量に与える影響を表3に示した。またえつかけの摂取量は哺乳期間の後半に増える（図1）ので、その時期には、毎日新鮮なえつかけを給与しているか、給餌器が汚れていないかどうかをチェックしてほしい。

表2：豚乳と人工乳飼料の成分値

成分 (%)	豚乳* 常乳	人工乳	
		子豚えつけ	水分78.8%換算
水分	78.8	6%程度	78.8
粗たん白質	6.2	22.5	1.7
粗脂肪	9.3	4.0	0.3
粗灰分	1.0	8.0	0.6
カルシウム	0.3	0.8	0.1
リン	0.2	0.7	0.1

*豚病学<第四版>より引用

●えつかけをより多く摂取させるために

えつけ飼料の摂取量は哺乳期間後半に伸びるが、より多く食べさせて離乳体重を大きくし、その後の発育も向上させたい場合は次の2点に注意したい。

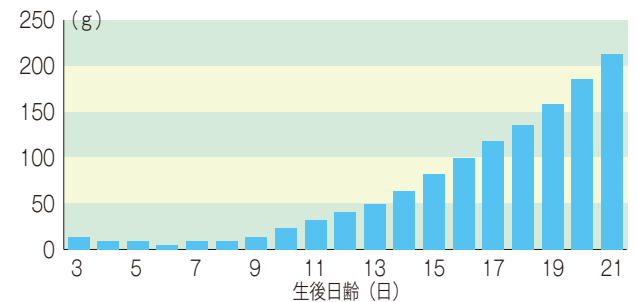
表3：哺乳中のえつけ摂取の有無と離乳後の人工乳摂取量

	摂取豚* n=22	非摂取豚 n=22
離乳体重 (kg)	7.9	7.3
離乳後0-8日		
日増体量 (g)	125	72
日飼料摂取量 (g)	202	160

*生後11日目～28日目（離乳）までえつかけを給与
E.M.A.M.Bruininxら（2002）

図1：哺乳中のえつけ摂取量推移

R.C.Sulaboら（2007）



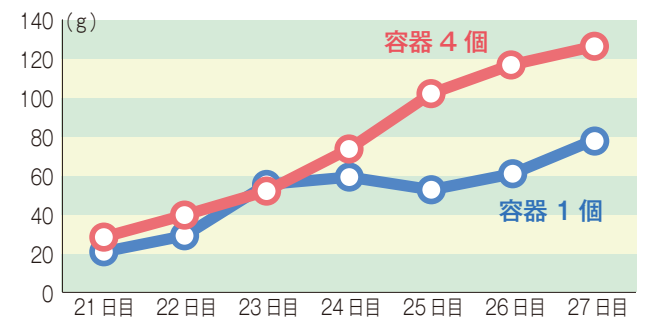
まずは飲水の確保。母乳は約80%が水分だが、えつけ飼料は6%程度しかないため、新鮮な水をたっぷり飲ませる必要がある。写真のようなカップ式飲水器が理想だが、無い場合はえつけカップのような容器で代用するのもお勧め。えつかけを水で溶いて液餌にする工夫も良い。



分娩豚房の子豚用飲水器

もう一つはえつけ飼料の接触の機会を増やすことである。えつけ飼料を入れた容器を分娩豚房内に複数置く場合、摂取量が増えることがわかっている（図2）。現実的にはえつけカップや給餌器を複数置くことは難しいかもしれない。その場合はカップや給餌器を置くと共に、ゴムマットの上にえつかけを撒いたり、複数口の給餌器を使うなどの工夫で接触の機会を与えることができる。

図2：えつけ容器の数と摂取量



*生後21日目～28日目（離乳）までえつかけを給与

M.C.Applebyら（1992）